やまだの歴史人物誌 39

このコーナーでは、町にゆかりのある歴史人物とその結び付きなどをシリーズで紹介しています。執筆者は町史編さん委員の佐藤仁志さん（豊間根・六八）です。

献身救助活動に尽力した山田町警察分署九警察官

明治二十九年六月十五日（旧五月五日）午後八時三十分頃大津波が襲来。浜沿いの家屋は流されその影もなく、道路は倒壊家屋、壊材が重なり小山をなし通行不能。暗闇の中、署員は分署に集合。分署舎は倒壊、役場内に臨時事務所を置く。

当時、宮古警察署山田町分署（明治九年新設）署員は九名、分署に署長警部神貞庸（かんさだのぶ）、巡査部長心得浅利和三郎、巡査小山玉夫の三名内勤、香川園輔、小川退蔵、及川征一、一条馬次郎の四名は外勤巡査、豊間根駐在所に石母田清松巡査、船越駐在所に渡辺浩巡査が配属されていた。

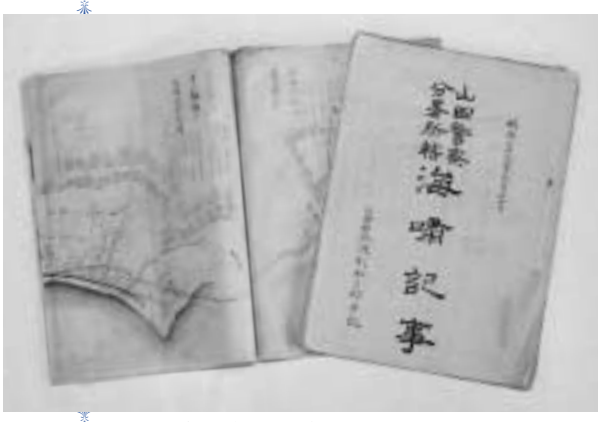
分署長の指揮のもと全署員が懸命に活動。真っ暗闇、高所高所に火を焚き、避難場所の目印とし、暖をとる場所、炊き出しの場所とし、早速人命救助と被災状況把握のため署員を大沢、織笠、船越に派遣。報告電文発信のため小川巡査を遠野町に派遣。船越駐在所渡辺巡査は負傷しながらも人命救助と遺体の収容、被害状況の把握に努め、豊間根駐在の石母田巡査は命により豊間根から三十名の救援隊を引率、救助活動、遺体の収容、壊材の撤去活動に当たった。活動は全域で夜を徹して行われた。

十六日以降も駆けつけた応援隊の力を得、署長、巡査の敏速適切な指示により連日、救助、撤去活動が懸命に行われた。

後日、臨時発刊された「風俗画報」に『…分署長神貞庸氏は夜も睡眠せず能く部下を指揮して被害地の取片付に従事し、死屍は大抵火葬せしめ、遺族又親戚の懇請する分のみ土葬せしめ、以て流行病の萌芽を防ぎたり、斯る急変の際に於いて氏の如きは実に職責を全ふせし者といふ可し』。『…神警部は頗る温厚篤実の人なるが被災後は、非常なる尽力を以て窮民を救助し非違を誡めつつありし…義侠心に強きにあらずんば焉ぞ此の如きを得む』と讃えている。

神貞庸は盛岡生まれの三十五歳、沈着勇敢な人。後年盛岡刑務所長に就任。

「海嘯被害明細図」は、津波襲来の様子や被害状況などを克明に記した貴重な文献。記録者浅利和三郎は秋田県横手町生まれの二十九歳。三十年に盛岡警察署議場掛専務を務め、大正七年横手町長に就任した。



津波襲来の様子や被害状況などが克明に記されている「海嘯記事」と「海嘯被害明細図」（町立図書館所蔵）

町長室から

「ふる里山田同郷の会」総会に出席し、一年ぶりに懐かしい方々とお会いし心安らぐ楽しい時間を過ごすことができました。印象に残った会話をご紹介します。

毎年出席されている方でしたが、親御さんが亡くなられて四十九日も済んでいないので今回は欠席するつもりでいた。でも兄妹で話し合っているうちに、出席して古里山田の空気を一緒に吸ってもらうことが供養になるのではないか、と思い直し二人で出席したというのです。亡くなられた親御さんも最後まで古里への思いを語っていたのかも知れません。

また、元教育長の山崎良三郎さんご夫妻も見えられました。九十三歳とのことですが、今は首都圏で娘さんと一緒にお住まいです。何としても出席したくて車に乗せられてきたと、皆さんとの再会を喜んでおられました。最後に来年の再会を皆さんと誓い合いました。

山田町長　沼崎喜一